

はしがき

本書は、大学で初めて国際政治経済学 (International Political Economy : IPE) を学ぶ読者を主な対象としている。現在の国際社会ではモノ、カネ、人、情報などが国境を越えて移動するグローバル化が進展している。ロシアによるウクライナ侵攻、ロシアやイスラエルに対する経済制裁、エネルギーや食料供給の不安定化、新型コロナウイルスのパンデミックに伴うサプライチェーンの混乱、AI やデジタル技術における巨大テック企業の影響など、連日のようにニュースで報じられる出来事の多くは、政治と経済の相互作用の中で生じている。国際政治経済学はこのような複雑な相互作用に焦点を当てる学問である。

本書で扱う「国際政治経済学」は、経済学ではなく国際政治学の一分野として位置づけられる。国際政治学において、伝統的に最も重要な政治課題 (High Politics) とされたのは軍事的安全保障であった。しかし、1970年代になると、ブレトンウッズ体制の崩壊、2度の石油危機、産油国による資源の「武器化」などを通じて、国際経済問題の重要性が広く認識されるようになり、このことが国際政治経済学の発展をもたらした。グローバル化が進む今日では、貿易や金融にとどまらず、環境、移民、人権といった多様な課題が国家の枠を越えて複雑に絡み合っている。本書は、こうしたグローバルな諸課題について理解できるようになることを目指し、基礎から応用としての具体的な課題まで段階的かつ体系的に学べるよう、4つの部で構成されている。

第I部では、国際政治経済学の基礎として、国際社会、国家、市場メカニズム、グローバル化といった基本概念を解説した上で、リアリズム、リベラリズム、マルクス主義、コンストラクティビズムという4つの主要理論を概説する。理論については抽象的で難解な印象をもつかもされないが、それぞれが世界をどのように捉えているのかを理解することで、複雑な現実を読み解くための有効な「道具 (ツール)」として活用できる。

第II部では、国家、国際機関、企業、NGO といった国際政治経済に関わる多様なアクター (行為主体) に焦点を当てる。グローバル化が進む中で、国際政治経済に影響を与える重要なアクターは国家だけではなくなっている。様々な分野で制度を設計・運営する国際機関、貿易や投資を通じてサプライチェーンを形成する多国籍企業、公正や正義といった国際規範の構築を推進する NGO など、これらのアクターの特徴と相互関

係を理解することは、国際政治経済学を学ぶ上で不可欠である。

第Ⅲ部では、貿易、金融、産業構造、エネルギー、知的財産権、IT（情報通信）といった主要分野ごとに歴史的展開を整理し、国際政治経済の構造に関する理解を深める。例えば、エネルギー分野では、気候変動対策として化石燃料から再生可能エネルギーへの転換が進む一方で、エネルギー安全保障との両立が課題となっている。また、インターネットやデジタル技術の発展により、個人が情報を発信できるようになったが、その基盤となるサービス（プラットフォーム）は民間の巨大IT企業が提供しており、偽情報の拡散やオンライン上の誹謗中傷などに誰がどのように対応するのが争点となっている。このような分野別の構造を把握することは、第Ⅳ部で扱う現代のグローバルな諸課題を読み解くための重要な基盤となる。

第Ⅳ部では現代のグローバルな諸課題として、市場統合・貿易自由化、金融危機、貧困・開発、移民、気候変動、環境、医薬品、労働、食料といった多岐にわたるテーマに加え、経済制裁など国家戦略としての経済を扱うエコノミック・ステイトクラフトや情報セキュリティといった新領域についても取り上げる。

各章では、側注として補足説明を記載していることに加えて、他章で扱う内容との関連を示すクロスリファレンスを充実させている。それによって、読者の皆さんが理論・アクター・構造・課題について適宜、参照しながら理解を深められるように工夫したものであり、大いに活用していただければ幸いである。

本書の執筆にあたっては、多分野にわたる複雑な課題を論じるため、各領域で精力的に研究を重ねてこられた9名の研究者にご寄稿いただいた。それぞれの研究成果をもとにした多彩な知見が各章に反映されたことで、本書は多面的な視点から国際政治経済を捉える一冊となっている。また、編集担当の梶谷修氏には多大なるご助力をいただいた。氏の大変丁寧かつ的確なサポートなくして本書の刊行は到底なしえなかった。この場を借りて、編者として、本書の刊行にご尽力くださったすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

国際政治経済学が扱うテーマは、私たちの日常生活や将来に大きく関係している。本書が、身近でありながらも複雑なこれらの問題を分析し、深く理解するための一助となれば幸いである。

2026年1月

執筆者を代表して
小尾 美千代